

平成27年度「全国学力・学習状況調査」における 藤松 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成27年4月21日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。
学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

(1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育

施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

(2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

(3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容実生活において不可欠であり、常に活用できようになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※ 本校の6年生は、単学級ですので、個人が特定されるような公表の方法については、配慮しています。

藤松 小学校 「平成27年度 全国学力・学習状況調査」の結果について

1. 教科に関する調査結果の概要

① 学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)結果

		国語 A	国語 B	算数 A	算数 B	理科
平成 2 5 年度	本市	60.3	46.3	74.6	56.5	
	全国	62.7	49.4	77.2	58.4	
平成 2 6 年度 (理科：平成24年度)	本市	69.1	52.6	76.2	55.4	59.7
	全国	72.9	55.5	78.1	58.2	60.9
平成 2 7 年度	本市	67.1	62.1	73.3	43.7	57.3
	全国	70	65.4	75.2	45	60.8

② 学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・書く力を問う問題については向上してきた。 ・言語についての知識理解、読解力についてはまだまだ課題である。
	よくできた問題	事例を挙げて説明する文章を書く問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	文を構成する主語述語との照応関係を捉える問題は正答率が低かった。
国語B	全体的な傾向や特徴など	・記述式問題に対する抵抗が少なくなってきた。 ・目的に応じて中心となる語や文を捉えるといった読む問題に課題がある。
	よくできた問題	登場人物の気持ちの変化を想像しながら音読をするといった読むときの工夫についての問題は正答率が高かった。
	努力が必要な問題	適切な内容を書き抜く問題での正答率が低かった。
算数A	全体的な傾向や特徴など	・基礎的な算数の計算については力がついてきた。 ・図形問題に課題が見られ、誤答も多かった。空間認識が苦手である。
	よくできた問題	繰り上がりのある2位数の加法の計算は、全員が正答することができた。
	努力が必要な問題	三角形の性質を使って角度を求める問題は正答率が低かった。
算数B	全体的な傾向や特徴など	・活用問題に対しても、苦手意識を持たず、粘り強く取り組むことができるようになった。 ・数量や図形についての技能が高くなっている。
	よくできた問題	切り上げた場合の見積りや四捨五入によるおよその数の計算がよくできており、正答率が高かった。
	努力が必要な問題	単位量当たりの大きさをを用いて、目的に応じた買い物の仕方を選択する問題の正答率が低かった。
理科	全体的な傾向や特徴など	・観察、実験により得られた結果を基に考察・分析するといった力は伸ばしている。 ・実験器具の名前や操作方法については、繰り返し指導する必要があるといえる。
	よくできた問題	生物の成長に必要な養分のとり方について、調べた結果をもとに考察し分析する問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	顕微鏡の適切な操作方法を選ぶ問題の正答率が低かった。

⑤ 学校における学習状況に関する調査結果の分析

- ・ 全体的に読解力について課題が残る結果であった。国語だけでなく算数や理科についても題意を読み取ることができず、問いと答えがかみ合っていない児童も少なくなかった。今後、読解力の育成に焦点を当てた授業づくりを行う等、授業改善を行っていきたい。
- ・ 漢字の読み書きについては少しずつだが力をつけてきている。無答率も低くなった。今後も継続して、漢字の反復練習等に取り組ませるようにしていく。
- ・ 視写タイムの取組などから、文字を書くことへの抵抗は少なくなっている。しかし、意見文を書くなど自分の考えを綴ることに関しては、課題が見られる。自分の考えをノートに書いて整理してから説明したり、授業の終わりに振り返りを書く活動を位置付けたりして、書くことに重点を置いた取組を行っていきたい。

2. 家庭生活習慣等に関する調査結果の概要

① 家庭学習習慣に関する調査結果の分析

- ・ 1時間以上家庭で学習する児童が、全国に比べて大きく下回り、学習時間の不足が課題である。30分より少ない・全くないという児童が合わせて30%おり、家庭での学習時間の二極化が見られる。家庭学習の具体的な取り組み方を指導していく必要がある。また、学校の宿題に取り組んでいる割合は高いものの、授業の復習に取り組んでいる児童については低い結果であり、課題が解決されていないことがわかった。
- ・ 自分で計画して勉強している児童の割合は、全国より30%以上低い状況である。
- ・ 読書量(読書時間・冊数)が増え、これまでの課題が解決されてきた。さらに、読書好きの子どもを育てていくために家庭との連携を深めたい。

② 生活習慣等に関する調査結果の分析

- ・ テレビやビデオ、DVDの視聴時間が全国に比べても多く、4時間以上の長時間の利用の割合が高い。
- ・ 携帯電話やスマートフォンを持っている児童は全国よりも多い。そのため、スマートフォンでの通話やメール、インターネット、テレビゲーム等に費やす時間も長いという結果であった。
- ・ 将来の夢や希望をもっている児童は全国平均よりも高い。それぞれの夢を実現させるための具体的な取り組みを行い、行動に結び付けさせていきたい。

3. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組(全校・学年・学級・教科毎の取組)

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

- ◎ 学力向上のための特設時間の実施
 - ・ 朝自習の時間に、火曜日計算、水曜日読書、木曜日漢字、金曜日視写と決めて全校一斉に実施する。
- ◎ 過去問題、アシストシート、活用力を高めるワークの活用
 - ・ 北九州市が作成したアシストシートや活用力を高めるワーク、WEB問題を授業の中で活用する。
 - ・ アシストシートや、全国学力テストの過去の問題を冊子にして、冬休み・春休みの宿題にする。
- ◎ 「読む」ことについて
 - ・ 10月・11月を読書月間に設定して、読書量の増加を図る。(家庭学習マイスター賞「読書の部」へ応募する)
 - ・ 全校児童一人一人に読書通帳を持たせ、読書の記録が残るようにする。
- 「書く」ことを習慣化
 - ・ 授業の終末、3分間を「振り返りタイム」として、振り返りをノート書くようにしたり、発表させたりする。
 - ・ 10分間作文に取組むようにする。

※ ◎は重点的に行うものとする。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- ◎ 家庭学習のスタンダード化
 - ・ 「家庭学習チャレンジハンドブック」を活用する。
 - ・ 家庭学習に取り組む時間や内容等をまとめた「ふじっ子家庭学習の手引き」を作成し、各家庭へ配布する。
 - ・ 家庭学習啓発DVD「自学のすすめ」を作成し、全校集会で児童に視聴させたり、PTAの集まり等で保護者に見せたりする。
 - ・ 家庭学習ノートを「ゴールドノート」と名付け、全校児童分準備し、無料配布を行う。
 - ・ 「ゴールドノート」展示会を7月・12月の年2回、個人懇談会の日に実施し、保護者への協力を促す。
 - ・ 家庭学習100日を目標に設定し、50日達成した児童には「がんばり賞」、100日達成した児童には「マイスター賞」を渡し、終業式や全校集会で表彰を行う。
 - ・ 北九州市家庭学習マイスター賞へ応募する。
- 全国学力・学習状況調査の課題と取組等を保護者へ周知
 - ・ 家庭教育学級や学年・学級懇談会、PTA運営委員会等で、結果と取組を説明し、家庭と連携し協力体制を整える。

※ ◎は重点的に行うものとする。